

大学生の親になることに関する心理と性役割態度の関連性

—ライフコース展望の語りに着目して—

Parenting Readiness, Gender-Role Attitudes, and Life Course Expectations of College Students

文学研究科教育学専攻博士後期課程在学

八 幡 ななみ

Nanami Yawata

I. 問題と目的

1. 問題

(1) 親準備性研究の変遷

青年の親になることに関する意識は、「親準備性」として研究されている。親準備性は「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態」などと定義されている（岩田ら、1982）。親準備性という概念が登場する以前の伝統的な価値観では、子どもを産む性＝育てる性と考えられており、「母性」の研究が行われていた（伊藤、1997）。

その母性の過剰な強調とも呼べるものが「子どもが小さいうちは、特に三歳までは母親が子どものそばにいて、育児に専念すべきだ」という「三歳児神話」である。この神話は日本社会に深く浸透し、1992年に行われた調査においては、既婚女性の約9割が「少なくとも子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい」という考えに賛成している（厚生労働省、1998）。しかし、この母性の過剰な強調が母親を家庭に縛り付ける結果となり、『平成9年度国民生活選好度調査』において、「育児の自信がなくなる」「自分のやりたいことができなくて焦る」「なんとなくイライラする」という感情で表される育児不安は、有職の母親よりも専業主婦に多いことが明らかとなった（経済企画庁国民生活局、1997）。三歳児神話がもたらした弊害が明らかになり、『平成10年度版厚生白書』では、母親が子育てに専念することが一般化したのは、高度経済成長の過程において男性の第三次産業の従事や核家族化が進行したためであり、決して古来から営まれている自然な行為ではない

ことを示し、「三歳児神話には、少なくとも合理的な根拠は認められない」と否定する記述がされた（厚生労働省、1998）。

三歳児神話の否定が示した様に、子どもを養育する能力は母親に限られたものではなく、父親も備え得るということが父親研究において明らかになっている。Field（1978）は、母親の一次的養育者、父親の一次的養育者、父親の二次的養育者の三群において、生後4ヶ月の子どもに対する行動に差異があるか検討した。結果は、一次的養育者の父親と母親は、二次的養育者の父親に比べて、高調音での話しかけ、しかめ面の真似、微笑反応が多いことが分かった。換言すると、母親か父親かに関わらず、養育者としての関わりの程度によって対子ども行動が生じることが示された。また、柏木・若松（1994）の、幼児期の子どもを持つ父親を対象にした研究でも、家事・育児参加の多い父親は子どもに対する感情が母親と似ることが明らかとなった。即ち、父親が育児に大きく関わり、二次的ではなく一次的に養育の責任を担う場合、対子ども感情が一次的養育者である母親に似てくるということである。これらの研究結果は、子どもへの愛情や養育する能力は生得的なものではなく、経験を通して培われるものであり、父親も母親と同じように子どもにとって重要な存在となれることを示している（大野・柏木、2008）。

青年期における「親性」を身に着けるための準備性である「親準備性」は、性受容、性役割観、子どもとの接触経験などと関連があることが先行研究によって示されている。松岡・和田・花沢（2000）は、大学生283名を対象に、親準備性と母性度・父性度、性受容、幼い子どもとの接触体験の関連性を調査した。分析の結果、親になることへの関心で表された親準備性は、男性に比べ女性のほうが高い傾向ではあったが、男女共に親になることに対して積極的態度で肯定的認識を持っていることが分かった。また、自身の性を受容している大学生ほど、親準備性が高いことも明らかになった。さらに、幼い子どもとの接触体験が多い大学生ほど、母性度が高く、親準備性が高かった。以上の結果より、松岡らは、青年期において親準備性を育成するために、幼い子どもと接触する機会を多く提供し、自身の性を受容できるようなサポートが必要であると主張している。

しかし、従来の先行研究において親準備性は多義的に用いられ、親準備性を「養育役割」としてのみとらえていることも指摘されている（岡本・古賀、2004）。そこで服部（2008）は、親準備性を「青年の親になることへの意識」と定義し、子どもの受け入れや親としてのアイデンティティ形成などの価値的・心理的側面から捉える尺度を作成した。その服部の定義と尺度を踏襲し、中嶋・後藤（2009）は大学生のアイデンティティと親準備性の関連性を検討した。彼らは先行研究を振り返り、親準備性が「将来子どもを育てるための資質」という側面からのみ捉えられていたことを指摘した。そして、従来の様に子育てへの関心や子どもへの感情を調査するのではなく、今日の青年が親になることをどのように認識しているのか、に焦点を当てた研究を試みた。具体的には、男女大学生422名と子育て経験者の成人男女224名を対象とし、親準備性とアイデンティティ形成の度合いの関連性について検討した。結果、アイデンティティが確立されていると親になることの意義をより強く感じるようにな

る一方で、基本的信頼感や自律性などアイデンティティの基礎となる部分が発達していなければ、親になることに負担感や不安感を強く感じる事が示唆された。服部（2008）や中嶋・後藤（2009）の様に、「青年の親になることに関する意識」に焦点を当てた親準備性研究は他に見られず、今後の研究結果の蓄積が待たれている。

（2）ライフコース展望と性役割態度の関連性

親準備性研究において考慮に入れなければならないのは、女性の高学歴化や社会進出がもたらしたライフコースの多様化である。その反映の一つとして、非婚化、晩婚化や晩産化もみられる（厚生労働省人口動態統計、2010）。就職や結婚、出産は、共にライフコース上の重大なライフイベントである。特に大学生は卒業後の進路を決定するにあたり、自身のライフコースを展望する重要な時期であると言える。

村松（2000）は、女子大学生に「理想」のライフコース展望と「実際になりそうなパターン」の両方の回答を求め、そこに変動を見出している。「理想」では、女子大学生協力者の39.6%が出産後も働き続けることを望んでいるが、「実際になりそうなパターン」になると26.9%に減少した。代わりに、出産退職型が「理想」では16.2%であったが、「実際になりそうなパターン」では31%と増加している。これらの結果から、「理想」では出産後も働き続けたいと希望する女子大学生でも、「実際」の制約などを考慮した際には退職する道を考えるなど、「理想」と「現実」でギャップが見られることを示唆している。

大道（1999）は、ライフコース展望を「家庭か仕事か」の二分法的視点ではなく、家庭を持ちながらも仕事を続けられる選択肢を女子大学生に提示した研究を行った。結果、従来は「専業主婦志向」と分類されていた女性も、何らかの形で仕事を持つことを望んでいること、逆に従来は「職業継続志向」と分類されていた女性も、家庭的成功を積極的に求めていることが明らかになった。この大道の研究は、「家庭か仕事か」の二分法的視点の研究において見落とされてしまう、女子大学生の複雑な心理があることを示した。

ライフコースは社会・文化的影響を受けるが、社会・文化的に規定される性であるジェンダーが、学生のライフコース展望に及ぼす影響は大きい（藤原、2009）。ジェンダー研究には多様な概念が提出されているが、ライフコース展望と深く関連するものとして、性役割や性役割態度が挙げられるであろう。鈴木（1991, 1994）は、性役割を「男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動」（鈴木、1994、p.34）、性役割態度を「性役割に関する問題に対する態度」（鈴木、1994、p.34）と定義しており、本研究においてもこれらの定義を用いることとする。

ライフコースを展望する上で、自分の家庭を築き、パートナーと家庭内の役割分担を決定する際の

将来像にも性役割態度が影響を及ぼす。伝統的性役割態度の下では、夫はメインで収入を得るブレッドウイナー (breadwinner) の役割、妻は家事育児などをメインで担うホームメーカー (homemaker) の役割と、それぞれの領域が明確に分化している。他方、平等主義的態度の下では、性役割分業は弱まり、パートナー同士が経済面・育児面において対等に参加している (Rogers & Amato, 2000)。

しかし、結婚し子どもを産み、親になることが当たり前でなくなった今日において、親になることは個人の選択の自由に大きく委ねられるようになり、その心理は複雑化していると考えられる。近年は子どもが「授かる」ものから「つくる」ものへと変化したことで、子どもを持つことのプラス面のみになく、マイナス面も考慮されるようになり、子どもの価値が縮小しているとする研究者もいる (柏木・平木, 2009)。子どもの出産人数について、その理由を尋ねた調査 (柏木・永久, 1999) では、子どもを一人しか産まなかった親は、その理由として、「自分のことをする時間がなくなる」「生活のリズムを崩したくない」「また子育てするのは億劫」「受験や教育のことを思うと気が重い」などを上位に挙げており、子どもをつくることで親に生じる制約を冷静に考慮しながら、子どもの人数を制限している現状が浮き彫りとなった。

さらに、柏木・永久 (1999) は、60代と40代の既婚女性の子どもを産むことを決めた理由を比較し、「子どもの価値」の変化を調査した。60代に比べ40代の女性のほうが、「経済的ゆとりができた」「自分の生活に区切りがついた」などの<条件依存>が上昇し、対して「子を産み育ててこそ一人前の女性」「結婚したら子どもを持つのが普通」などの<社会的価値>が低下していることが示された。一方で、「子どもを育ててみたかった」「子育ては生きがいになる」などの<自分のための価値>は、世代を超えて重視されており、様々な条件と天秤にかけながら子どもを持つかどうか検討している現代女性の葛藤が映し出されている。

2. 目的

上記のことをふまえて、大学生の親になることに関する心理を明らかにすることは、少子高齢化社会となった我が国において、まもなく家庭を築き、子どもを産む世代となる青年が、親になることをどの様に捉えているのかという知見を得られる点で有意義である。また、大学生が就労と育児の双方を視野に入れたライフコースを思案できるようなキャリア教育へも、有用な知見を与えられる。さらに、親準備性研究の発展に貢献するため、本研究においては質問紙調査による量的研究の限界を考慮し、面接調査による質的研究を一層重視する。質的研究によって、従来の量的研究では検討されてこなかった大学生の複雑な心理を明らかにすることを目的としている。

したがって、本研究では、大学生の親になることに関する心理を検討するために、①性役割態度との関連、②ライフコース展望、の二点に着眼する。具体的には、研究1において質問紙を用い、大学生の親になることに関する意識と性役割態度の関連性を調査し、研究2において面接調査を行い、ラ

イフコース展望の語りから、親になることに関する心理を明らかにする。

Ⅱ．研究１：質問紙調査

大学生に対して質問紙調査を実施し、親になることに関する意識と性役割態度との関連性を考察する。柏木・永久（1999）は、女性が家族としての一体感よりも個人としての「私」を大事にしたい、と考える傾向を個人化志向と名付け、有職主婦は専業主婦に比べて個人化志向が強く、子どもに期待する価値（情緒的価値、自分のための価値、社会的価値）が低いことを見出した。これは、子どもの価値の低下を直ちに意味せず、情緒的支えや自分の成長、社会から認められる存在となることは、子育てを通してではなく、「私」個人の世界で得たい、との思いの表れとも言える（柏木・伊藤、2001）。また、子どもを持つことがマイナスとならないような条件を模索し、その上で価値ある子どもを持ちたいとの葛藤を反映している。さらに、上述した村松（2000）の研究において、「理想」では出産後も働き続けたいと希望する女子大学生でも、「実際」の制約などを考慮した際には退職する道を考えるなど、「理想」と「現実」でギャップが見られることが見出された。上記より、伝統主義的価値観に基づき女性が母親となることが当然視されていた時代から、母親となることが一つの選択肢となった現代では、平等志向的な性役割態度を持つ女性ほど、伝統志向的な女性に比べて、親になることに関する不安や負担感が高いと考えられる（仮説１）。一方で、上述したように親になることに対する意識は、伝統志向のか平等志向のかに関わらないと推測される（仮説２）。男性においては、父親による育児参加が叫ばれる今日においても育児休業を取得する者は依然非常に少ない等、育児のための時間が確保可能な職場風土ではない（大野・柏木、2008）。そのような状況下で平等志向的な性役割態度を持ち、育児を担っていく責任感を持つ男性ほど、伝統志向的な男性に比べ、親になることに対する不安や負担感が高いと予想される。

１．方法

（１）調査協力者

東京の大学（私立A大学、国立B大学）の学生 367 名に協力して頂いた。2012 年 7 月に、授業時間を利用しての集団調査を実施した。調査対象者の内訳は以下の通りである。

表1 調査協力者の内訳

(学年)	A 大学 (平均年齢＝ 19.38 歳)	B 大学 (平均年齢＝ 18.71 歳)	全体 (平均年齢＝ 18.99 歳)
1 年生	47 名(31.1%)	199 名(93.0%)	246 名(67.4%)
2 年生	97 名(64.2%)	6 名(2.8%)	103 名(28.2%)
3 年生	6 名(4.0%)	2 名(0.9%)	8 名(2.2%)
4 年生	3 名(0.7%)	7 名(3.3%)	8 名(2.2%)
(性別)			
女性	92 名(60.3%)	115 名(53.7%)	207 名(56.4%)
男性	61 名(39.7%)	99 名(46.3%)	160 名(43.6%)
(学部)			
教育学部	102 名(67.5%)	214 名(100%)	316 名(86.1%)
経営学部	21 名(13.2%)		21 名(5.7%)
文学部	13 名(8.6%)		13 名(3.5%)
法学部	8 名(5.3%)		8 名(2.2%)
経済学部	7 名(4.0%)		7 名(1.9%)
工学部	2 名(1.3%)		2 名(0.6%)
計	153 名	214 名	367 名

(2) 調査内容

・親準備性尺度（服部、2008）（43 項目、4 件法）

服部（2008）は、親準備性を、親としてのアイデンティティ形成の観点から、「親になることに対する意識」（p.429）と定義して尺度を作成した。43 項目、4 段階からなるリカート尺度である。親になることの意義（ $\alpha = .89$ ）、子どもの養育（ $\alpha = .89$ ）、親になることへの負担感・不安感（ $\alpha = .84$ ）、親になることへの要件（ $\alpha = .80$ ）、世代の継承（ $\alpha = .70$ ）の 5 因子が認められ、信頼係数も十分に高いことが確認されている。各因子が独立している為からか、先行研究では尺度全体の得点は算出されていない。したがって、本研究においても各因子ごとに分析を行う。

・平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S；鈴木、1994）（15 項目、5 件法）

男女の関係と役割意識に対する態度、子どもをもつこと・育児・子どもの教育に対する態度、女性の就労に対する態度において、個人レベルにおける男女平等主義的な態度を測定する尺度である。40 項目ある平等主義的性役割態度スケール（鈴木、1987）を 15 項目に短縮した尺度であるが、男性

($\alpha = .89$) 女性 ($\alpha = .91$) 共に信頼性係数は十分に高いことが確認されている。回答はリカート式の5段階尺度である。得点を逆転する項目は15項目のうち11項目である。得点が高いほど、平等志向的な態度を持つとされ、反対に得点が低いと、伝統志向的な態度を持つとされる。

・フェイスシートには、性別、年齢、学年、所属を記入する欄を設けた。また、面接調査への参加を承諾する対象者には、氏名と連絡先の記入を求めた。

(2) 仮説

仮説1：SESRA-S 得点と親準備性の＜親になることの負担感・不安感＞因子得点の間には正の相関があるだろう。

仮説2：SESRA-S と親準備性のその他の因子は独立であろう。

2. 結果

(1) 記述統計量と信頼性分析

各尺度・因子の記述統計量を以下に記す。

表2

	SESRA-S	親になること の意義	子どもの 養育	親になること の負担 感・不安感	親になること の要件	世代の継承
平均値	55.03	43.06	52.72	26.66	17.90	9.10
標準偏差	8.157	4.639	3.786	4.230	1.951	2.116
最頻値	29	48	56	26	20	9
最小値	29	24	41	14	11	4
最大値	75	48	56	36	20	12
α 係数	.834	.870	.864	.811	.699	.763

次に、男性と女性の間で各尺度の平均値に有意差があるか検討するため t 検定を行った。結果は表3の通りである。

表3 性別間 t 検定

	女性 (SD) n=206	男性 (SD) n=159	有意差
SESRA-S	55.87 (7.62)	53.94 (8.70)	*
親意義	43.87 (4.05)	42.01 (5.13)	**
養育	53.27 (3.58)	52.00 (3.94)	**
負担感	26.60 (4.02)	26.73 (4.50)	ns
親要件	18.02 (1.87)	17.74 (2.05)	ns
世代継承	9.06 (2.04)	9.14 (2.21)	ns

*:p<.05, **:p<.00

(2) 仮説の検討

上記の t 検定において性別間の平均値に有意差が見られたため、仮説 1 に関わる相関分析を性別ごとに行った。しかし、いずれにおいても **SESRA-S** 得点と＜親になることの負担感・不安感＞の間に有意な相関関係は示されなかった。

次に、学年で平均値に差があるか検討するために、分散分析を行った。結果、1 年生 (n=246) と 2 年生(n=103)の間でのみ有意な差が見られたため、両者の間で t 検定を行った。＜親になることの意義＞(1 年生 = 42.41(SD=4.91)、2 年生 = 44.41(SD=3.66)) と＜子供の養育＞(1 年生 = 52.30(SD=4.10)、2 年生 = 53.60(SD=2.97)) において、2 年生が 1 年生よりも有意に高かった（それぞれ $t(253.81)=4.18, p<.00, t(260.65)=3.32, p<.00$ ）。また、**SESRA-S** (1 年生 = 55.60 (SD=8.13)、2 年生 = 53.55 (SD=8.04)) において、1 年生が 2 年生よりも有意に高かった ($t(347)=2.15, p<.05$)。

従って、仮説検討のための相関分析を、1 年生と 2 年生の性別ごとに分けて行った。結果を表 4 に示す。

表4 学年別相関分析 (SESRA-S × 親準備性尺度)

		親意義	養育	負担感	親要件	世代継承
1 年生女性	相関係数	.025	.057	-.099	.098	.087
SESRA-S	有意確率	.777	.524	.262	.270	.326
2 年生女性	相関係数	.151	.071	.108	.087	.153
SESRA-S	有意確率	.216	.563	.375	.476	.211
1 年生男性	相関係数	.085	.079	-.063	.130	.077
SESRA-S	有意確率	.360	.399	.501	.163	.409
2 年生男性	相関係数	.106	-.062	-.153	-.004	-.055
SESRA-S	有意確率	.549	.728	.387	.982	.756

※1 年生女性 n=129、2 年生女性 n=69、1 年生男性 n=117、2 年生男性 n=34、両側検定

上記より、学年ごとに分析を行っても、SESRA-S と親準備性尺度との間にはいかなる相関関係も見出せなかった。

以上より、SESRA-S 得点と＜親になることの負担感・不安感＞因子の間に相関関係は見出されず、仮説 1 は支持されなかった。一方、SESRA-S 得点と親準備性尺度のその他の因子得点の間にも相関関係は見出されず、仮説 2 は支持された。従って、大学生の親になることに関する意識は、性役割態度が伝統志向的か平等志向的かに関連していないことが示唆された。

仮説 1 が支持されなかった要因として、SESRA-S と親準備性の質問紙が、調査協力者自身の性役割態度や親になることに関する意識を反映せず、「一般的な」意見に対しての賛成の程度を測定した可能性が挙げられる。例えば、SESRA-S の「家事は男女の共同作業となるべきである」という項目に対して、自分の考えに「とてもよくあてはまる」と評価しても、「社会的・一般的には」そうであるべきと望むが、「自分が実際に家庭を持つ」となるとそうとも限らないという考えの持ち主である可能性がある。同様の可能性は親準備性尺度にも当てはまる。また、本研究の調査協力者は平均年齢が 20 歳にも満たない大学生が大半であったため、「親になることを想像」するよう努めても、漠然としたイメージしか湧かず、結局は一般論で回答せざるを得なかった可能性も考えられる。

さらに、対象者の大部分が教育学部の学生であったため、サンプルに偏りが生じている可能性も考慮する必要がある。即ち、教育学部の大学生は、一般の大学生よりも子どもを育む意識が高い傾向にあった可能性が考えられる。

研究 1 の質問紙調査においては、性役割態度と親になることに関する意識の間には関連性が示されなかった。しかし、上述の問題点が見受けられたことも考慮し、研究 2 の半構造化面接において、性役割態度と親になることに関する意識との関連性のより詳細な検討を行う。

Ⅲ. 研究 2：半構造化面接

大学生の親になることに関する心理を中心に、その相互影響要因としての性役割態度との関連性を、ライフコース展望の語りを切り口として、半構造化面接を行い探索的に分析する。

1. 方法

(1) 調査協力者・調査手続き

研究 1 において、面接調査の参加を承諾した A 大学学生 11 名（女性 5 名、男性 6 名；全て文系学部部に所属）に 40 分～60 分程度の半構造化面接を実施した（調査期間：8 月～11 月）。面接協力者の許可を得て、面接の内容を IC レコーダーで録音し、後日逐語記録を作成した。面接協力者は、SESRA-S

得点の高い順にアルファベットで記号付けた（表5）。

表5 面接調査協力者の内訳

		SESRA-S	親意義	養育	負担感	親要件	世代 継承
A君(20)	3年	58	35	51	29	18	8
B君(22)	4年	57	48	56	31	20	12
C君(19)	2年	55	45	56	29	19	9
D君(20)	2年	52	47	54	25	19	9
E君(19)	2年	50	37	54	26	18	5
F君(18)	1年	38	24	41	29	16	8
(男性平均)		53.94	42.01	52	26.73	17.74	9.14
Gさん(20)	2年	65	41	53	28	15	6
Hさん(20)	2年	59	48	54	21	18	10
Iさん(22)	4年	58	45	51	16	16	8
Jさん(19)	2年	51	45	53	26	18	11
Kさん(19)	2年	34	42	53	25	18	9
(女性平均)		55.87	43.87	53.27	26.6	18.02	9.06

(2) 質問内容

以下の質問項目を軸とし、半構造化面接を行った。協力者がより自然に語れるよう、質問項目の順序は臨機応変に変更した。①と⑥は、藤原（2009）の大学生のライフコース展望に関する研究で用いられた選択項目を、本研究の主旨に沿うよう改変したものである。表6、表7を提示し、協力者の意見に最も近い選択肢を選んでもらい、その選択肢を選んだ理由等を聞き、面接を進行した。

- ① 自身の理想のライフコースと、将来のパートナーに希望するライフコース。（表6）
- ② 結婚、出産をするタイミングの希望の有無とその理由。
- ③ 子どもがほしい[ほしくない]と思う理由。
- ④ 子どもを持ってから、仕事を続ける[続けない]と考える理由。
- ⑤ 子どもを持つこと、自分が親になることに関するイメージ。
- ⑥ 男性と女性の仕事と家事育児のバランス。（表7）
- ⑦ 上記のような考えを持つようになった影響やきっかけ。
- ⑧ 男性（女性）に生まれて良かったと思うこと。損したと思うこと。
- ⑨ 生まれ変わったら男女どちらの性に生まれたいか。

⑩ 理想のライフコースを実現させるために必要なサポート等。

表6 ①協力者自身の理想のライフコースと、将来のパートナーに希望するライフコース

a.	卒業 → 家事手伝い → 結婚 → (パートナーの)出産 → 家事育児に専念
b.	卒業 → 家事手伝い → 結婚 → (パートナーの)出産 → 家事育児 → 新規就業
c.	卒業 → 新規就業 → 結婚退職 → (パートナーの)出産 → 家事育児に専念
d.	卒業 → 新規就業 → 結婚退職 → (パートナーの)出産 → 家事育児に専念 → 再就職
e.	卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → (パートナーの)出産後、退職 → 家事育児に専念
f.	卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → (パートナーの)出産後、退職 → 家事育児 → 再就職
g.	卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → (パートナーの)出産後も就業継続
h.	卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 子どもを持たずに就業継続
i.	卒業 → 新規就業 → 結婚しないで就業
j.	その他
k.	わからない

表7 ⑥ 男性と女性の仕事と家事育児のバランス

A.	女性は、仕事を中心に考え、家事・育児は夫に任せ、人並み以上に社会的成功をおさめるべきだ。
B.	女性は、仕事を中心に考え、家事・育児は夫に任せ、人並みの稼ぎがあるべきだ。
C.	女性は、仕事を中心に考えるが、家事・育児も夫に協力すべきだ。
D.	女性は、仕事と家事・育児の両方を同じようにするべきだ。
E.	女性は、仕事をほどほどにして、家事や育児に協力すべきだ。
F.	女性は、仕事はせず、家事や育児に専念すべきだ。
G.	女性は、結婚はせずに仕事を中心に考えるべきだ。
H.	その他
I.	わからない

※同様の内容で男性版も用いた。

2. 結果

(1) 分析方法

大谷(2008、2011)が考案した質的データ分析手法の SCAT (Steps for Coding and Theorization)を用いた。SCAT を用いる利点は、データの深層的な意味の抽出に優れている点や、分析のプロセスが明示化されているため、再検討や複数名での協働が可能になり、妥当性の確保に優れている点である。本研究においても臨床心理学専修の大学院生複数名と協働して分析を行い、妥当性と信頼性の確保に努めた。

SCAT は、まずデータをセグメント化し、それぞれのセグメントにおいて、

< 1 >データ中の着目すべき語句

< 2 >それを言い換えるためのデータ外の語句

< 3 >それを説明するための語句

< 4 >そこから浮き上がるテーマ・構成概念

のステップを実施する。そして、< 4 >で浮上したテーマ・構成概念を紡いで、ストーリーラインを記述する。

IV. 総合的考察

1. 総合的考察

(1) 質問紙と半構造化面接に見る性役割態度

質問紙調査と半構造化面接の分析結果より、個人の中で性役割態度に二面性があることが示唆された。即ち SESRA-S に表れる性役割態度は意識化されている「表面的」な性役割態度を測定する一方で、半構造化面接では、明確には意識化されていない「潜在的」な性役割態度が語りに反映されていた。例えば男性 A 君、B 君、C 君の場合、SESRA-S では平均よりも高い得点であり、平等主義志向的であると言えるが、半構造化面接からは伝統的性役割観が強く根付いており、それを将来のパートナーに求めている様子が語られた。SESRA-S 得点は平均的かそれ以下であった D 君、E 君、F 君も、半構造化面接でパートナーの意志を尊重したいと語る一方で、伝統的な性役割観に基づいた母親役割を望む気持ちも語られた。女性の G さん、I さんは、SESRA-S 得点は平均以上であり、男女平等意識が強いことが示されたが、半構造化面接においては、自分の家庭では伝統志向的であることが示された。

上記のような、質問紙と半構造化面接に見られる性役割態度の差異は、熊野（2008）が説明する「表面的」な性役割態度と「潜在的」な性役割態度の差異であると考えられる。社会的には男女平等的考えが定着しつつあり、質問紙調査では意識化された表面的な平等主義志向が抽出されるが、一方では伝統的性役割観が潜在的レベルで強く根付いており、その価値観が半構造化面接で家庭場面において強く表れ出たと考えられる。大野（1998）が、男性の表面的平等主義に関して、「一般論としては賛成。わが家に関しては・・・」と表現する心境が、大学生の男女にも見られることが明確になった。

さらに、矛盾する性役割態度を同時に保持することは、宇井（2002、2005）によって明らかにされた男女平等の判断基準と公的・私的領域の関連性を適用することによっても説明できる。宇井は、女子大学生を対象に面接研究を行った結果、職場などに代表される公的領域では、「機会の平等（雇用や昇進などの機会が、男女平等であるかどうか）」「個人の能力の原理（性別ではなく、個々人の能力がきちんと評価されているかどうか）」「努力の原理（個々人の努力がきちんと評価されているかどうか）」「必要性の原理（出産・育児休暇の制度が整っているかどうか）」が判断基準として用いられ、家庭に代表される私的領域においては「話し合いによる手続き的公正（夫婦できちんと話し合うかどうか）」「男女の特性の原理（男性特有の能力や、女性特有の能力に合わせて分担するかどうか）」が判断基準として用いられていることを示唆した。Iさんの場合、SESRA-S 得点が平均以上の平等主義志向であった。半構造化面接の語りからも、就職活動や生活上で男女別の対応を取られると男女差別であると捉え、男女は一緒であるから区別するべきではない、と語っている。しかし、将来の家庭においては自ら出産退職を望み、パートナーが稼ぎ手となり自分が育児をメインで担うことを望んでいる。このIさんの性役割態度の矛盾は、ソトである公的領域では「機会の平等原理」が働き、性別によって役割が制限されないことを求める一方、ウチである私的領域では、女性は母性を活かして育児の主体者になるべき、という「男女の特性の原理」が働いていることが考えられる。即ちソトとウチで異なる判断基準を用いることによって、ソトでは平等主義志向であり、ウチではいわゆる伝統主義志向的態度を取っている可能性がある。宇井（2002）は女子大学生のみを対象として男女平等の判断基準と領域の関連性を述べたが、本研究において同様の関連性が男子大学生にも見られた。A～F 君が男女平等に賛成するのは公的領域であり、私的領域である家庭においては「男女の特性の原理」に則った役割分業、即ち伝統的性役割分業を望んでいることが明らかにされた。

（2）性役割態度の「揺れ」

質問紙や半構造化面接を通して見受けられた、「意識—無意識レベル」或いは「公的—私的領域」での性役割態度の不整合は、「社会一般、建前としてはリベラルになってきているとはいえ、現実、プライベートにおいては決してそうとは言えない」（武知、2008、p.27）性役割態度に関する現状を表している。この不整合が生じる要因を半構造化面接の語りから分析し検討した結果、青年期に至る

までに培ってきた価値観と、大学生活の中で得た知識や経験との間に齟齬が生じ、両者の間で「揺れ」を経験している大学生の姿が明らかになった。協力者の「揺れ」の有無と、その根拠となる発言や SCAT を通して浮かび上がったテーマを次ページの表 8 に記し、それぞれの特徴を検討する。SCAT による分析から得たテーマには下線を引いている。

また、半構造化面接の分析を通して、性役割態度と親になることに関する心理は複雑に絡み合い影響しあっていることが明らかになった。性役割態度の「揺れ」の有無によって、親になることに関する心理にも共通点が見出されたため、その特徴も併せて記す。

表 8 「揺れ」の有無とその根拠となる発言・テーマ

	「揺れ」有	「揺れ」無
男性	<p>A君: (A1)「今、頭の中が戸惑ってるといっか」</p> <p>(A2)「やっぱり今見ると、お父さんが仕事行のが普通なのかな、みたいなのがあります。でもそうすると、さっきのあの、女性の家、みたいな感じにまたなっちゃうのかなっていろいろのがあるんですよね。ちょっと自分の中でも、まだ上手くはいってない。」</p> <p>(A3)「長年自分が育ってきた中で、やっぱりお母さんが家にいるのが普通だったの。大学に入って改めて女性の社会進出みたいなことを聞いて、頭が混乱してるのかなって」</p>	<p>B君: (B1)「(イクメンとか)そういうのも全然ありだなって思うんですけど、でも実際それを自分がやるとなったら話は違ってくるかなって。そんなに料理もできないし、器用でもないで」(B2)「女の人が働く分には全然いいと思え、育児も何方、男も協力していくべきだと思うんですけど、でも、自分が家庭を持つっていろいろのことを考えたときに、やっぱり仕事を中心に考えるべきかなって思ってます。それは慣習っていうよりは、一人の家庭を持つ人としての責任なのかなって」(B3)「自分の家とそんな感じだったので、それがいいのかなって思ってた」</p> <p>C君: (C1)「(出産後は)酒の母親のサポートを受けて、パートナークにも就業継続して(ほしい)奥さんにも自由にしてほしいから、まーそれ(母親からのサポート)がなかったら、奥さんは「選択的職」(出産後職→育児専念→再就業)」</p> <p>D君: (D1)「頭では理解してるんですけど、男性と女性の仕事と家事のバランスっていろいろのは、そこは全然平等だっていう風に思うんですけど、でも実際やっぱり、子どもを育ててやっていく面は、本当に女性が担うところが多いとは絶対思うんで。それは父親にはできない部分かなって」(D2)「自分のやっぱり家庭の影響ですかね」(D3)「自分が信頼して(子育てを)母親に任せられればなって」</p> <p>E君: (E1)「家庭養育へのこだわりがあり、それを実現させるためにパートナーには仕事をほとんどに任せて家事育児をすることを望む→原家族は日常の子どもの世話をする母親、休日に遊び相手になる父親 →「やっぱりそれが染み付いてるっていつか、それで実際オレが嫌だっと思って思ってたことなかったし。そういうもんなのかなんてのはあったから。」(E2)「自分がさっき専業主夫になっっていうのは言ったものの、実際そうなったときに子どもがどう思うのかになって。例えば就業参観で周りがみんなお母さん来てるのに自分だけお父さん来てるっていろいろのも嫌だろうし。自分も若干気にするし。周りがそんなだったら、ママ友にも入れないし。」</p> <p>F君: (F1)「男性は仕事を中心に、家事育児も協力すべき」「今これが普通なんじゃないですか?」(F2)「今時代がたぶん、そういっぱい流れちゃなくなってきたので、女性に関しては何も言う必要ないと思うんですけど、男はやっぱり外出で働いてって感じですかね」(F3)「専業主夫になることに関して」「色んなことだと思います。地域の人の目とか、逆転してるんじゃないかって思われたりとか。でも、うちん家が父が働いて母が専業主婦って形の家庭だったんで、あんまり想像つかないですね」</p>

	「揺れ」有	「揺れ」無
女性	<p>Gさん: (G1)「色々な授業受けたり、末とか読んだりする中で、やっぱり母親が大事だになって思うようになって。そういう考えになる前は男の人に全部育児とかも任せていいって思ってたんですけど」(G2)「結婚してすぐ専業主婦になりたかったって子に対しては、あんまり理解できないっていか、じゃあ何を楽しみに生きるんだろう、っていうのがあって。逆に、結婚して子どもがいて、仕事を中心に考えなくていい状況なのに、子どもが小さい時にも仕事に優先させてることに聞けば、じゃ、なんで子ども産んだんだろうって、すごく難しいけど、そういう疑問があります。」(G3)「ちょっと前までは、出産しても絶対仕事は辞めたくないと思って。むしろ、結婚前別にくたないって思うくらい、すごい仕事が好きで。自分が男の子だったら仕事が中心の人生になってたのかなって。そういう人生も、またそれですごく良いかなって思ったり」</p> <p>さん: (J1)「授業とかでやっていると、本当の教育者は母親だ、みたいになっていうのを言ってたんで。教師も、他の子どもを預かって教えるっていう責任あるけど、やっぱり自分の子どもはそれ以上にもっと責任を持たなきゃいけないのかなって」(J2)「考え方が古いのかしらない。女の人が家事をやる、みたいなのがちよっとあるのかな」(J3)「(生まれ変わったら)男子に生まれたいな、と。女性だと制限が色々あるじゃないですか。私結構、家事とかそういうのじゃなくて、一人で旅とかしたい人なんです。」</p>	<p>Hさん: (H1)「日本では男性は外、女性は中って聞いたとき、すごいショックで。」(H2)「家事育児は女性だけのものではないんじゃないかなーって思ってた。二人で、女性と男性で一つの家族を作り上げていくんじゃないかなーって」(H3)「特に母親は、すごい重要で大事、その乳幼児期の子にもとって、っていうのを学んでいて。授業でやっていることだけじゃなくて、それを実際に色んな事例を読んで、授業と反映して、あーなるほど！ってすごく実感して」</p> <p>さん: (I1)「就活をして、そこまで仕事をずーっとやり続けるっていう概念はあんまり自分の中にはなかったです。とっぴあえず働いて、でも子どもも産みたいからーみたいな。子どもは絶対産みたいと思ってます」(I2)パートナーが専業主夫を希望したらどうするか。ー「でも私が子育てを中心にしたいです。でも、あんまり事例がないからそう思うのであって、そっちでもいいって分かったらいいのかなー。でもあんまり働きたくないかもしれない、そんなにずっと」(I3)「私が男の子だったら就活してすごく重要なんだろうな、プレッシャーを感じるんだろうなって。私は女の子だから自分の好きなところでもいいよって親も言ってくれし、お給料よりも自分の好きなことで選べるけど。だからそういうプレッシャーは女の子のほうがすごく少ないのかなって」</p> <p>Kさん: (K1)「できたもう家庭に入りたいたいって人なので。仕事はしなきゃいけないようにあればするんですけど、専業主婦でできるなら、家にお母さんがいたほうがいいと思うので。」(K2)「家事をするのが好きなので、でも時間がほしいとんどうじゃないですか。だからそれに専念できるなら越したことはないかなーって」(K3)「最近はおく女性、みたいなのが推されてるけど、でも子ども産みたいじゃないな」</p>

i. 男性

「揺れ」有り男性 A 君

仕事をする父親、専業主婦の母親の家庭で育ったため、母親が家にいることが当たり前であり、それ以外の形態について改めて考えることをしていなかった。「パートナーが働き、A 君が専業主夫という形態をパートナーが望んだらどう思うか？」との筆者の問いに対し、全く想定外の形態であったため、「相当ビックリ」し、戸惑っていた (A1)。大学の授業で女性の社会問題について学び、平等主義的価値観に触発され、それを理想とするが、一方で自身が今まで培ってきた「父親が仕事・母親が育児」の価値観と相容れないことが判明し、混乱している状態である (A2,A3)。

・親になることに関する心理

「揺れ」有り男性は A 君のみのため、共通点を述べることはできない。A 君自身は、子どもを持つことはまだ先のことと感じており、漠然とした想像を抱いている段階である。育児休暇取得に積極的な理由を尋ねても、子どもの世話がしたい思いや、パートナーを助けたい思い等は語られなかった。A 君が重視する社会的意義のあること、として育児休暇取得を考えている様子である。

「揺れ」無し男性 B～F 君

B、C、D、E、F 君は、世間一般における男女平等主義や、男性の育児参加の推進に対して否定的な立場を表明する訳ではない。しかし、今までに培われた伝統的性役割観に則った考えは揺ぎ無く、A 君のような混乱状態には陥っていない。よって、彼らを「揺れ」が無いグループと設定し、その発言を 6 つのタイプに分類した。

- ① 原家族体験優位 (B3,D2,E1) : 原家族における自分の生育環境に馴染みがあるため、自分も将来同じ様な形態の家庭を築いていくと考えている。
- ② 世間の傾向準拠 (F1) : 世間的な傾向として、夫は仕事メインで、妻は家事育児がメインと認知し、それに準拠することを考えている。
- ③ 稼ぎ手役割の強調 (B2,F2) : 女性の就労に反対はしないが、夫の責任は稼ぎ頭としての役目を果たすことであると自覚し、自分は仕事を中心とすることに迷いが無い。
- ④ 専業主夫への抵抗 (B1,E2,F3) : 一般論として専業主夫に異論はないが、「自分が」専業主夫となるには抵抗を感じる。自分にはその特性・能力が備わっていない (B1) ことや、世間に定着していない形態のために、周囲の評価に対する懸念を有すること (F3)、子ども視点から母親のほうが適切であろうとの推測や、女性のコミュニティーに入っていくことへの懸念 (E2) が理由として語られている。
- ⑤ 母性の強調 (D1,D3) : 育児における母性の優位を強調し、男性は育児の主体的な担い

手から降りる選択肢を取ることが妥当であると考えている。

- ⑥ 妻の条件付き就労許可（C1）：妻の就労を応援したい気持ちはあるがそれは条件付であり、もし条件が整わなければ、妻は仕事をせずに家事育児に専念するべきと考えている。

・親になることに関する心理

子どもに対するイメージは個人により異なるが、原家族の父親に対しての思いには共通点が見られた。自分の父親に対して、「あれ以外父親を知らないで、ま、そうなるのかな」「お父さんは尊敬できる人ですし、ま、ああなりたいなーとは思います」など、原家族の父親をモデル化し、自分の将来の父親像を思い描いている様子が共通していた。

ii. 女性

「揺れ」有り女性 G さん、J さん

G さんと J さんは伝統的な女性役割に束縛感を覚え、伝統的性役割観に則るか、或いは囚われずに自分の望む方向に進むかの間で「揺れ」を経験している。彼女たちの発言は4つのタイプに分類可能である。

- ① 母性強調の知識（G1,J1）：大学の授業から母性を強調する内容の知識を得て、母親として育児の主体者となることに責任を感じるようになった。
- ② 女性でいることの束縛感（G3,J3）：もし自分が男性として生まれたら出産退職をする必要もなく、仕事を自由に続けられたらと思う（G3）や、家事役割に縛られずに自由にできたらと思う（J3）との思いを抱いている。これらの発言は、女性が家事育児の主体者となるべき、という価値観に、心から納得はしていない様子を表している。
- ③ 仕事と育児の間の葛藤（G2）：自己実現としての仕事に打ち込みたい思いと、女性として育児主体者となる義務を感じ、両者の間で「揺れ」を経験している。
- ④ 無自覚に有していた伝統的性役割観への気づき（J2）：家事役割は女性の務め、との「古い考え」（J2）を無自覚に有していたことに気づき、「揺れ」を経験し始めている段階と考えられる。

・親になることに関する心理

子どもを持つことに関して、「自分の時間が取られる」「子どもを持つことは重荷」「自分のことを後回しにして、子ども優先でやらなければならないから、しんどい」「子どもの成長は教育次第だから親は責任重大」など、子どもを持つことに関して心理的圧力を感じていることが共通して表現されていた。

Gさんは、仕事への志向が強いため、育児によって自分の為の時間が奪われる抵抗感を感じ、そこから子どもを「重荷」と表現している。仕事を自己実現の場と捉え、育児よりも仕事への志向が強いGさんの姿は、家族としての一体感よりも、個人としての「私」を大事にしたい思いが強い女性（柏木・永久、1999）の一つの例であると考えられる。しかし、Gさんの親になる意識が低いとは一概には言えない。「一度産まれたら大きくなるまで、自分のことは後回しにして、子どものためにやってあげたい、自分のことよりも子どものことを全部優先させてやっていきたいと思っている」との語りからは、むしろ子どもを持つことに関して真剣に検討し、親としての役割を果たそうとしている姿が表されている。子どもを持ち、自分が親となることを重く受けとめ、責任感を大きく感じるからこそ、子どもを持つことに関しての心理的圧力が高いとも考えられる。

Jさんは、今まで無自覚に則ってきた伝統的性役割観の存在に気づき、それを受容することに窮屈さを感じるようになってきた段階と言える。親の反対を押し切った新たな挑戦の開始、親の影響を受けて志した進路の考え直し、など、「自分が」どうしたいかを考え、行動に移そうとしている。親になることを否定的に捉えているわけではないが、「本当の教育者は母親」との考えに触れ、親となることにプレッシャーを感じている状態である。

「揺れ」無し女性 Hさん、Iさん、Kさん

Hさんは、Hさんが平等主義的と認知するX国で育ったことから、社会文化的背景において他の学生と異なる。生育環境から培った平等主義的価値観（H1、H2）と、大学の知識で得た母性強調の知識がHさんの中では対立しておらず、「実感」（H3）して受け入れていることから、「揺れ」が無いと判断した。

Iさん、Kさんの発言には、自らが家事育児の主体者となることに迷いがなく、積極的に受容している様子が語られているため、「揺れ」が無いと判断した。Iさん、Kさんの発言を検討し、3つのタイプに分類した。

- ① 出産への揺ぎ無い思い（I1、K3）：自分の仕事の状況や、世間の風潮に関わらず、絶対に子どもを産みたい、との強い思い。
- ② 家事育児への積極的姿勢（I2、K1、K2）：家事育児の担い手となることを積極的に望んでいる。
- ③ 就労への消極的姿勢（I2、I3）：家事育児を担うことに関して積極的なため、就労へは消極的な態度をとる。稼ぎ手になるつもりはないので、就労に対して楽に構えている（I3）。

・親になることに関する心理

「（子どもを）ほしくないと思ったことはない」「絶対に子どもは産みたい」出産は命を繋ぐ自然な行為、「次の世代を育てること」「生き物として正しい形」など、出産や子どもを持つことを肯定

的に捉え、積極的に望む姿勢が共通していた。

I さん、K さんは、女性は家事育児の主体者になるべき、という伝統的性役割観を肯定的に受容している。出産を次の世代へ命を繋ぐ自然な行為と捉え、自分が親になることに関して積極的な態度である。これは、親準備性の高い青年の特徴として、自身の性を受容していること（松岡・和田・花沢、2000；林・菊地、2002）や、「男は仕事、女性は家事育児」といった伝統的性役割観を受容していること（山田、1987；松嶋・皆川・宮岡、2001）と示唆した先行研究に沿う結果となった。

H さんは、社会文化的背景が異なり、原家族から平等主義的価値観を取り入れている点でも他の女子学生と異なる。しかし、子どもを持つことに対して肯定的で積極的な態度を持っている点で、I さん K さんと共通していた。

（3）性役割態度・親になることに関する心理への影響因

青年期までに培ってきた価値観と大学生活で得た知識・経験により引き起こされた性役割態度の「揺れ」の有無を検討した結果、共通項として、「子どもが小さいうちは母親が子どもの傍にいたべき」という「三歳児神話」にも似た価値観の存在が確認された。そして、「揺れ」の無い大学生はそれを肯定的に受容し、「揺れ」の有る大学生はそれを受容することに戸惑いを感じていることが明らかになった。柏木・伊藤（2001）は、三歳児神話が合理的根拠に基づいていないと判明しているのにも関わらず、未だにそれを信じる人が多く、若い世代にも浸透していることを見出しているが、本研究で得た面接協力者の語りも、それを裏打ちするものとなった。

半構造化面接で得られた協力者の語りから、「子どもが小さいうちは母親が子どもの傍にいたべき」という価値観が形成された要因と、それに対抗する要因を表 9 に挙げ、検討する。

表 9

「子どもが小さいうちには母親が子どもの傍に在るべき」という価値観の形成要因	
①原家族体験	<p>(1a)「自分の母親は仕事をしないでなくて、一緒にいる時間が長かったのがあって。やっぱり一番はお母さんだなんて。一番家族の中でも分かってくれるし、安心できるしって思ってたので。お母さんが子どもの常に傍にいてあげたほうが子どもは安心できるのかなって。自分の体験を通してそう思います。」</p> <p>(1b)「やっぱり、家において自分たちのことを見守ってくれたのは母親の面が大きいのかなって。で、父親は叱るべきところで叱ってって。自分は本当に両親に感謝してるの」</p> <p>(1c)「自分が本当に母親が好きで。ま、父親も好きなんですけど。純粹に両親の自分との関わり方とか、両親の関係とか見たときに、イメージはあるっていうか」</p> <p>(1d)平日は仕事をし、休日に遊び相手になる父親。日常の世話をする母親。→「それが染み付いてるというか。それで実際オレが嫌だと思って思ったことはなかったし。そういうもんなんかなってのはあったかな。」</p> <p>(1e)途中から就労し始めた母親に対して→「最初はもう本当に大変だなーって思ってたんですけど。自分も大変だったなーって。＜筆者：支える家族も大変ですよ＞そうですね、そうでしたね。」</p> <p>(1f)母親がパートタイム就労していた→「友だちとかを見てると、お家に帰ってお母さんがいるのいいなーみたいな。鍵持ってたので、お家にお母さんがいて、おやつ出るのいいなーって。そういうの考えると、専業主婦もいいのかなって」</p> <p>(1g)母親が就労していた→「私保育園が嫌いだったってのもあって。出来れば母親という時間のほうが欲しかったなっていうのを、今思い返してみると結構。だから、保育園のときに母親が迎えに来てくれるとすごい安心するっていうか」</p>
②母性強調の知識	<p>(2a)「すぐく乳幼児期は大切な土台で、特に母親はすごい重要で大事って（授業で学んだ）」</p> <p>(2b)「色々な授業受けたら、本読んでいく中で、やっぱり母親が大事だって思うようになったので」</p> <p>(2c)「授業とかでやっていると、本当の教育者は母親だ、みたいなっていうの言ってたんで」</p> <p>(2d)「最近の授業でも、母親の存在はすごく大事だってことは聞いてるんで。出来れば幼稚園の間とかはいてあげられたいのかな」</p> <p>(2e)「（授業で）学校での教育者は教師だけど、家庭での教育者はやっぱり母親だっていう話であったり」</p>

③子どもとの接触体験	<p>(3a)「子どもを朝引き離すときに、わんわん大泣きしてるのを見たりすると、やっぱり一番いいのはお母さんと一緒にいれるのがいいのかなって」</p> <p>(3b)「自分自身も（育児を）積極的にやりたいんですけど、どうしてもやっぱり、他の保育園の子どもとか見ても、お父さんが迎えに来るよりもお母さんが迎えに来るほうが嬉しいそうだったりして。やっぱり、お父さんよりお母さんなのかなって」</p> <p>(3c)子どもと関わるサークル活動にて→「子どもと関わるときに、子どもたちは女の子のほうに行ってる。やっぱり女の子のほうで安心するのかなって。育児の面でも、子どもが父親と母親に求めているものは違うのかなって。そういう面で、女性の愛情っていうのが子どもにとって絶対必要なのかなって。」</p>
④母親が就労していた家庭の評価	<p>(4a)「私はずっとお母さんが専業主婦だったんで、ずっと傍にいたんですけど。愛情があっても仕事で子どもの傍にいてあげられなかった家庭って子どもがすごい不安定になる可能性があるなって（周りの友だちを見て思った）」</p> <p>(4b)「たまたまうちの小学校だけかもしれないんですけど。共働きの家の子のほうで成績が良くなかったってのがあって」</p> <p>(4c)「両親が共働きだと、周りにそういう子もいて、寂しい思いしたって子もいるんで、それだったから、ある程度の自立するまではやっぱり子どもが面倒に専念したほうがいいのかなって」</p>
⑤子どもが小さいうちに母親が子どもとの傍にいたほうがいいという価値観の形成に対抗する要因	<p>(5a)「男女平等等っていうのは何となく分かってたんですけど、その授業を受けて、あ、これはなんかすごいなって。（女性の人権に興味を持った）」</p> <p>(5b)「先生の話の中に、女性の就労問題で、保育園の数が足りない、みたいな。で、だったら保育士になろうかなって思ってたんですが」</p>
⑥働く女性モデル	<p>(6a)「（女性が）せっかく高校や大学行ったのに、卒業して社会勤めたんだったら、男性と同じようにパンパン仕事をされたほうがいいのかなって。高校時代の先生を見てても、給料も男性と同じだけもらえたりしてて。そういうのを見ると、（女性が）働くのもいいのかなって思いますね」</p> <p>(6b)「X国では、仕事と家事育児とか両立している人たくさん見たので、自分もそういうイメージが大きいですね」</p>

「子どもが小さいうちは母親が子どもの傍にいた方がいい」という価値観の形成要因

① 原家族体験

原家族において、母親が専業主婦で父親が仕事という形態であった場合（1a,1b,1c,1d）、傍にいてくれた母親に強い愛着を持ち、自分の体験から、子どもにとって母親が傍にいたのが最も好ましい生育環境であると感じ、自分の将来の家庭において同じ形態を再生産する動機付けとなっている。

一方で、原家族において母親が就労していた場合（1e,1f,1g）、母親が家におらず子どもであった自分が苦労した体験や、寂しかった体験が影響し、自分の将来の家庭では子どものためにも、母親が家にいる形態を作りたい、との動機付けになっている。ここで注目すべきことは、「父親が仕事で家にいなくて寂しかった。大変だった。」という語りは出てこないことである。父親が仕事に出て、母親が家にいる、という伝統的性役割観が根強く浸透している様子を表している。

② 母性強調の知識

大学で受ける授業で、母親は乳幼児期に子どもの傍にいた方がいい、という母性を強調する知識に大きく影響を受けている（2a,2b,2c,2d,2e）。しかし、これらの発言を検討しても、なぜ父親ではなく「母親が」大事なのか、という詳細な理由は語られていない。面接で語られていないだけで、授業では学んだ可能性もあるが、いずれにしても母性を強調する際に、詳細な理由は必要ないほど受け入れられやすい価値観であることを表している。さらに特筆すべきは、育児における父親の重要性をどの面接協力者も語らなかった点である。研究分野においては「父親の再発見」以降、父親研究が盛んに行われるようになったが（大野・柏木、2008）、一般的なレベルでは育児における父親役割軽視の現状はさほど変化していない様子を示している。

③ 子どもとの接触体験

子どもと接触した体験では、実際の子どもの行動観察を通し、子どもが父親よりも母親を求めていると感じ（3b,3c）、母親が子どもの傍にいた方がいいと考えている（3a）。しかし、この子どもの行動の裏には育児の主体者が母親であり、父親よりも母親に強い愛着を感じている可能性があることが見過ごせないだろう。伝統的性役割分業の下、母親が育児の主体者を担い、その母親に子どもがより強い愛着を感じているから、母親は家にいて子どもの傍にいた方がいい、という議論はトートロジーとも言える。また、伝統的性役割観が強化される仕組みも示している。

④ 母親が就労していた家庭の評価

子どもの不適応を、母親の就労（4a）や両親の共働き（4b）に帰属したり、子どもが寂しい思いをする（4c）など、共働きの否定的側面を強調し、母親は働かず子どもの傍にいた方がいいと思

っている。

「子どもが小さいうちは母親が子どもの傍にいたべき」という価値観の形成に対抗する要因

⑤ 社会で女性が抱える問題に関する知識

大学の授業で、社会において男女が不平等に扱われている知識を得て、子どもを持つ女性の就労を応援したいとの気持ちが生じている（5a,5b）。

⑥ 働く女性モデル

社会で男性と同等に働く女性の姿（6a）や、仕事をしながら家事育児を両立している女性の姿（6b）を通して、女性が働くことの肯定的イメージを築いている。

以上、「子どもが小さいうちは母親が子どもの傍にいたべき」という価値観の形成要因の検討によって、日本社会に伝統的性役割観が強く根付いていることや、大学生が体験や知識の獲得を通してその価値観から影響を受けていることが明らかになった。この価値観と、自身が青年期までに培ってきた価値観が一致する大学生は、自身の価値観を補強するものとして容易に取り入れることができる。一方で、性役割態度の「揺れ」を経験している G さんや J さんのように、「母親が傍にいたべき」という価値観が心理的圧力となり、親になることを負担に感じる大学生も存在することが示された。

2. 本研究の意義

本研究は半構造化面接を実施し質的研究を行うことにより、従来はパターン化され見落とされていた大学生の親になることに関する意識を、個別記述的にストーリーラインで表し、その背景に存在する複雑な心理を明らかにした。更に、11名の個別記述を比較考察したことで、性役割態度の二面性や、そこに「揺れ」が存在すること、また「揺れ」の一要因として「三歳児神話」にも似た価値観の影響があることを示した点が、本研究の意義と言えよう。

本研究は、伝統的性役割観を批判するためのものではない。個別のストーリーラインからも読み取れるように、稼ぎ頭として一家を支える大黒柱となることに価値を見出し望んでいる男子大学生もいれば、その稼ぎ頭を支え、専業主婦として家事育児役割を果たすことに意義を感じている女子大学生もいる。自身の価値観に則って希望する道を選択している姿は自己一致しており好ましい状態とも言える。しかし本研究は、その価値観の間で「揺れ」を経験している大学生に焦点を当て、以下の三点を提言する。

① 大学生に教授する知識の熟考の必要性

本章（３）で述べた通り、大学の授業や書籍等から得る母性を強調する知識が、大学生に多大な影響を与えていることが示唆された。これらの知識を伝達する媒体が、故意に母性を強調しているか否か定かではない。しかし、それに関わらず、知識を得る大学生にとっては「強調されて」受け止められている可能性がある。協力者との面接の中で「やっぱりお母さんが大事」という語りが多く見られたことから、母性強調の知識は受け入れられやすいことも判明した。従って、知識を教授する側は慎重にその内容を検討する必要がある。

また、偏りのない知識を教授することも必要である。例えば、育児における母親だけでなく父親の役割の重要性、保育園養育による子どもへの弊害は確認されていないこと、子どもの視点だけでなく、母親の視点を取り入れること、などである。

面接協力者の語りの中で、育児における父親の存在の大切さを語る人は見られなかった。しかし、父親、祖父母、同胞など、子どもにとって愛着の対象となる重要他者が多く存在することが子どもの育ちに良い影響をもたらすことが分かっている（尾形、2011；柏木、2011）。母親が大事、という知識が深く根付いている文化であるからこそ、父親やその他の家族構成員の重要性も主張していく意識が必要である。

また、「保育園に預けるのは子どもがかわいそうだから、小さいうちは母親が傍にいて家で育てたい」という語りや、保育園での養育を良く思っていない語りが多くみられたが、保育園での保育経験が子どもには決して否定的に働かないとの知識も教授する必要性があろう。子どもに影響を及ぼすのは、家庭養育か保育園か、ではなく、保育の質であるという研究結果が蓄積されてきている（河原・根ヶ山、2010）。

さらに、育児においては子どもの視点が強調され易いが、育児の主体者として期待されている母親の視点を見過ごすべきではない。半構造化面接において、「子どもがかわいそうだから、小さいうちは母親は働かずに傍にいてあげるべき」との語りが見られた。しかし、母親の立場に視点を移すと、有職主婦より、専業主婦のほうが育児不安が高いという研究結果が出ている（経済企画庁国民生活局、1997）。

育児において、母親の存在が大事なことは自明の理である。しかし、母親の大事さのみが強調されることにより、心理的圧力を感じる女子大学生もいれば、育児へ積極的に関与する意欲を削がれる男子大学生もいる。従って、知識を教授する側は偏りのない知識を伝える必要がある。

② 大学生の自己理解の必要性

半構造化面接を通して、自身が有している性役割観に無自覚な大学生が多く見受けられた。また、A君やJさんに顕著に見られるように、本研究の面接が契機となり、自己の有する性役割観を意識化した協力者もいた。性役割観等を含む価値観は、物事を決定する際の判断基準となるた

め、進路決定やライフコース展望に大きく関わる。その際に、自身の有している価値観を明確にしておくことは、より納得した選択の可能性に繋がる。よって、卒業後の進路など、ライフコースを展望する時期である大学生にとって、自己理解の促進はキャリア教育の重要な部分である。企業の情報や、就職活動のアドバイスのみでなく、結婚・出産も視野に入れたライフコースの展望や内省を促し、自己理解の機会を大学生に与えるキャリア教育の実施が必要である。

③ 「揺れ」を経験する大学生へのサポートの必要性

本研究では、青年期までに培ってきた価値観と、大学生活で得た知識や経験の間で「揺れ」を経験している大学生の姿が浮き彫りになった。「揺れ」の状態は、葛藤状態とも捉えられるが、葛藤を経験しないことが良い状態なのではなく、葛藤を通して自己を再吟味することこそが青年にとって必要である。即ち、社会的役割の受容＝適応ではなく、自身の葛藤に主体的に対処するか否かが青年の精神的健康に関わってくる（柏木・高橋、2008）。同時に、葛藤状態に向き合うことは危機的状态でもあるため、その挑戦をサポートするような大学教員による支援や、学生相談の充実などを含めたカウンセリング体制の基盤が必要である。

3. 今後の課題

本研究は、質問紙調査、半構造化面接共に教育学部の学生が大半を占めたため、サンプルに偏りがあったことは否めない。今後、他学部の学生も含めた調査を行い、より一般化に適したデータを得る必要がある。また、大学に通っていない青年について同様の調査を実施することで、大学生活で得る知識や経験が、大学生に与える影響のより詳細な検討が可能となる。

さらに、本研究の半構造化面接を通して、アイデンティティ形成と親になることに関する心理や性役割態度との関連性が示唆された。今後、アイデンティティ形成も考慮した上で質問項目を作成し、半構造化面接を実施することで、青年期における発達課題と親になることの心理や性役割態度との関連性についての知見を得る必要がある。

引用文献

大谷尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、教育学、54（2）、27-44

鈴木淳子（1994）「平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成」心理学研究、

65 (1)、34-41.

武知優子 (2008) 「思春期・青年期とジェンダー」 青野篤子、赤澤淳子、松並知子編『ジェンダーの心理学ハンドブック』pp.20-36. ナカニシヤ出版

中嶋律子・後藤宗理 (2009) 「青年期の親準備性—子育て経験者との比較—」 名古屋市立大学看護学部紀要、8、9-14

服部律子 (2008) 「親準備性尺度作成のための因子抽出の試み」 思春期学、26 (4)、428-432

参考文献

Field, T. (1978). Interaction behaviors of primary versus secondary caretaker fathers. *Developmental Psychology*, 14, 183-184.

Rogers, S.J., & Amato, P.R. (2000). Have changes in gender relations affected marital quality? *Social Forces*, 79, 731-753.

岩田崇・秋山泰子・井上義朗・深谷和子 (1982) 「青年期の親準備性に関する研究」 昭和 57 年度厚生省心身障害者研究報告書、466-467

伊藤裕子 (1997) 『青年期における性役割観の形成』 風間書房

伊藤葉子 (2006) 『中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習』 風間書房

宇井美代子 (2002) 「女子大学生における男女平等を判断する基準—公的・私的・個人領域との関連から—」 青年心理学研究、14、41-55.

宇井美代子 (2005) 「女性大学生における男女平等の判断基準：職場・家事・育児場面における違い」 社会心理学研究、21(2)、91-101.

大谷尚 (2011) 「SCAT：Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」 感性工学、10(3)、155-160.

大野祥子 (1998) 「家族役割とジェンダー—家族という営みの現状と展望」 東洋、柏木恵子編『社会と家族の心理学』pp.81-112. ミネルヴァ書房

大野祥子・柏木恵子 (2008) 「親としての男性—父にはなるが、父はしない？」 柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学—もう一つのジェンダー問題』pp.153-173. 有斐閣

大道真佐美 (1999) 「女子大学生のライフコース展望—ジェンダーと教育研究における二分法的視点の実証的再検討—」 進路指導研究、19 (2)、13-21

尾形和男 (2011) 『父親の心理学』 北大路書房

岡本裕子・古賀真紀子 (2004) 「青年の親準備性概念の再検討とその発達に関連する要因の分析」 広島大学心理学研究、4、159-172

- 柏木恵子（2011）『父親になる、父親をする—家族心理学の視点から』岩波ブックレット No.811、岩波書店
- 柏木恵子・伊藤美奈子（2001）『女性のライフデザインの心理②—自分らしい家族を設計する—』大日本図書
- 柏木恵子・永久ひさ子（1999）「女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか—」教育心理学研究、47、170-179
- 柏木恵子・平木典子（2009）『家族の心はいま—研究と臨床の対話から—』東京大学出版会
- 柏木恵子・若松素子（1994）「親となることによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み—」『発達心理学研究』5、72-83.
- 河原紀子・根ヶ山光一（2010）「保育園におけるアロマザリング」根ヶ山光一、柏木恵子編著『ヒトと子育ての進化と文化』pp.185-200. 有斐閣
- 熊野道子（2008）「家族とジェンダー」青野篤子、赤澤淳子、松並知子編『ジェンダーの心理学ハンドブック』pp.131-148. ナカニシヤ出版
- 「第14回出生動向調査—結婚と出産に関する全国調査—独身者調査の結果概要」
<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.pdf>
(2012/12/31 アクセス)
- 厚生労働省（2010）『平成22年人口動態統計』
- 鈴木淳子（1987）「フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討」社会心理学研究、2、45-54
- 鈴木淳子（1991）「平等主義的性役割態度：SESRA（英語版）の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較」社会心理学研究、6(2)、80-87
- 中嶋律子・後藤宗理（2009）「青年期の親準備性—子育て経験者との比較—」名古屋市立大学看護学部紀要、8、9-14
- 村松幹子（2000）「女子学生のライフコース展望とその変動」教育社会学研究、66、137-155
- 羽田野花美（2007）「大学生男女の親性準備性に性役割および信頼感が及ぼす影響」思春期学、25(2)、252-259
- 林文俊・菊地里江（2002）「女子大学生の親子関係と自我同一性・性役割観・親準備性との関連について」文化情報学部紀要、2、23-31.
- 藤原善美（2009）「青年のジェンダー・アイデンティティとライフコース展望における自律性の関連性の検討—大学生の調査データの分析—」キャリア教育研究、28、19-26
- 「平成9年度国民生活選好度調査」
<<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/98/19980219c-senkoudo3-9.gif>>
(2012/12/31 アクセス)

「平成 10 年度版厚生白書」

<<http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz199801/b0029.html>> (2012/12/31 アクセス)

牧野カツコ・中西雪夫 (1989) 「高校生の親になることへの準備状態と保育教育」日本家庭科教育学会誌、32(2)、51-66.

松岡治子・和田佳子・花沢成一 (2000) 「青年期男女における親準備性の性差および母性度・父性度の発達」母性衛生、41 (4)、492-505

松嶋弥生・皆川恵美子・宮岡久子 (2001) 「青年期後期における母性準備性と性役割との関連—看護学生と他学科の学生との比較—」母性衛生、42(4)、645-652

山田隆 (1987) 「女子青年の母親になることへの自我関与」母性衛生、28(1)、114-118